

事例②

全学でめざす能力の育成のため 全ての能動的学修を体系化

宇都宮大学

教養教育（基盤教育）においてアクティブラーニングの導入を進めてきた宇都宮大学は、全ての正課科目のアクティブラーニング的要素を顕在化し、科目ごとの知識・技能に加え、ジェネリックスキル獲得のためのカリキュラムの体系化を全学的に進める。既存の科目ですでに実践されているアクティブラーニングの要素を可視化することによって、学部教員に気づきと改革への参画を促す点に特徴がある。

基盤教育から着手し 学部教育に展開

宇都宮大学ではジェネリックスキルの育成を目的に、アクティブラーニングを主体とする授業を「アクティブ・ラーニング科目」（以下、AL科目）と名付け、リテラシーや教養、人間性などを身に付ける基盤教育の教養科目に組み込んでいる。その展開に関して2013年度に文部科学省の特別経費を獲得*。さらに、山形大学職員として学士課程教育の改革に努めた経験のある蜂屋大八氏を基盤教育センターの特任准教授として招くなど、AL科目の拡充を進めた。

2014年度には大学教育再生加速プログラム（AP）のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）の複合型に選定された。AL科目を必修化するほか、全科目を対象に、授業でのアクティブラーニングの手法とその効果を可視化する。さらに、ジェネリックスキル修得のための学士課程教育全体の体系化と学修成果の評価システムの確立をめざす。当初の3年間は基盤教育、2017年度からの2年間は各学部の専門教育が対象だ。

*獲得対象は、基盤教育センターのプロジェクト「『あらたな社会』を耕す行動的知性を養成する21世紀型教養教育の構築—アクティブ・ナレッジ・ファームを核として—」

アクティブラーニングで 「行動的知性」を育成

宇都宮大学がジェネリックスキルの育成に取り組み始めたきっかけは、東日本大震災だった。東北の玄関口に位置することから、復興に必要な行動力や構想力の育成が大学の果たすべき役割であると認識。自学が育成するジェネリックスキルを、教育目標にある「行動的知性」という言葉で表現。獲得した知識の体系を実際の行動につなげて社会の課題解決を図ることを重視し、講義型科目と連携する実践型のAL科目を2011年度に開設、知識を行動に転換する力を修得させる。

AL科目の開講数は現在30に増えているが、必修のものはなく、履修する科目とその数は学生に任されている。今後は基盤教育のうち、大学での学び方に関する「初期導入科目」、現代社会で必要なリテラシーを培う「リテラシー科目」、そして「教養科目」において、それぞれアクティブラーニングを導入した科目を必ず履修するカリキュラムを整備する。

「リテラシー科目」には、2015年度にAL科目「とちぎ終章学総論」を必

修として設置。栃木県が直面する高齢化社会の課題について理解し、ポジティブに生きるための知識やスキルを身に付ける科目で、地（知）の拠点整備事業を推進する「とちぎ終章学センター」が管轄する。各学部が管轄する「初期導入科目」は、学部によりアクティブラーニングの導入状況がまちまちであったが、指導内容のガイドライ

【図表1】 行動的知性能力指標（案）

態度・志向・感性

自己の創造・形成

- ①自己表現力、計画性
- ②創造力、マネジメント力
- ③論理的思考力、発想力
- ④自己認識、発信力

他者との協働・協調

- ⑤傾聴力、柔軟性
- ⑥責任感、調整力
- ⑦協調性、許容力

社会の課題認識

- ⑧規律性、倫理観
- ⑨判断力、課題認識

リテラシー・スキル

- ⑩言語スキル、読解力
- ⑪数量的スキル、情報分析力
- ⑫科学的論拠法、知識構築力
- ⑬プレゼンテーション力

宇都宮大学の特性

- ⑭地域性
- ⑮国際性

【図表2】 アクティブラーニング要素の抽出と検証

学生アンケート

①～⑤の能力について、授業のはじめと現在との間で感じる各個人の成長の度合いを選択してください。

能力指標	レベル				
	5	4	3	2	1
①自己表現力、計画性	5	4	3	2	1
②創造力、マネジメント力	5	4	3	2	1
③論理的思考力、発想力	5	4	3	2	1
④自己認識、発信力	5	4	3	2	1
⑤傾聴力、柔軟性	5	4	3	2	1

授業ごとに集計し、レベルの平均値をグラフ化

- ①自己表現力、計画性
- ②創造力、マネジメント力
- ③論理的思考力、発想力
- ④自己認識、発信力
- ⑤傾聴力、柔軟性

成長した能力と手法の関係を確認

目標とした能力が育成できているかを検証

アクティブラーニングチャート

能動的学修手法	①自己表現力・計画性	②創造力・マネジメント力	③論理的思考力・発想力
プレゼンテーション		○	
ディベート	○		○
フィールドワーク	○	○	

能力と手法の関係をチャート化

授業担当教員アンケート

担当授業で採り入れた手法とその回数を教えてください(複数回答可)

- プレゼンテーション (回)
- ディベート (回)
- フィールドワーク (回)
- グループワーク (回)
- ...

シラバス

【授業の到達目標】
プロジェクトの目的を理解し、プランを立てて計画的に遂行できるようになる。

ンを2014年度に見直し、全学部への導入が進められつつある。

「教養科目」に関しては、AL科目1、2科目と講義形式の数科目をテーマごとにパッケージ化し、教養科目での行動的知性獲得の均質化と効果的な学修を実現する。最初にAL科目を受講して学びへの意欲を高め、その後、講義形式の科目で知識を修得させるしくみが検討されている。

自覚なく行われていた 教育手法を可視化する

学部の専門教育におけるアクティブラーニングの導入、カリキュラムの体系化は、既存の科目に内包されているアクティブラーニングの要素を可視化することによって行われる。

AP事業の中心的な役割を担う蜂屋氏は、「知識修得の面から体系化され

ている学部ごとの専門教育のカリキュラムを、今後はジェネリックスキル修得の面からも体系化するアプローチが必要になる。教員の多くは、すでに普段の授業に何らかのアクティブラーニングの手法を導入し、スキルを育成している。まず、そうした実績に気づいてもらいたい。そして、本学における手法と効果の関係を可視化し、一人ひとりの教員、各学部の協力のもとに全学の力で、知識とジェネリックスキルの両方を獲得できるカリキュラム体系への転換を実現したい」と説明する。

蜂屋氏は以下の手順を考えている。

まず、育成をめざす能力の指標を策定する（図表1）。授業アンケートを実施し、指標の各項目について成長度合いを自己評価させ、科目ごとの平均値をグラフ化する（図表2）。教員へのアンケートでは、授業に採り入れていたアクティブラーニングと学生が身に付

けた能力の伸長との関係を確認。集計して、手法と実際に育成された能力の関係性をチャート化する。

各教員は、シラバスに記した各授業の到達目標と、実際に伸びた能力を比較。合致しない場合、手法と能力の関係性のチャートを参照し、目標の再設定や教育手法の再検討を行う。アクティブラーニングの手法をまったく採り入れていない授業を除き、ここまでで、各授業に含まれる同手法と、それによって伸びる能力が可視化される。

ここからは、複数の科目を通じて各能力指標をバランスよく育成するために、学部ごとにジェネリックスキル修得の面から体系化を図る工程になる。使用するツールが、「行動的知性ルーブリック」（図表3）だ。各能力指標について、1（最も基本的な能力）～4（学士課程修了時の能力）のレベルを設ける。科目ごとに育成する能力とレ

ベルを定め、縦軸に評価項目（能力指標）、横軸にレベルをとった表に基盤教育、専門教育、卒業研究の全ての科目名をプロットする。

専門教育や卒業研究において表に空欄や片寄りができただけの場合、また同じ科目でも担当する教員によってプロットする箇所が異なる場合などは、学部による調整、すなわちカリキュラム・ディベロップメントが必要だ。一部の教員だけでこれを行うのではなく、多数の教員が意見を交換しながら行うことによって、FDとして有効に機能する。

「多くの教員は自身がアクティブラーニングを行っていることに無自覚。育成する能力への関心も弱い。一連の工程により、ほぼ全ての教員がアクティブラーニングを行い、行動的知性の育成に関わっている実態が見えるようになるはず」と蜂屋氏は期待する。

これらの工程は2014年2月現在、基盤教育の中で試行している段階だ。図表1の能力指標については、OECDのキーコンピテンシーなどをベースに蜂屋氏が案を作成。各学部の確認を経て、2014年度内に確定の予定。学生、教員へのアンケートは2014年度にAL科目で実施しており、2015年度は他の科目でも行う。基盤教育内でノウハウ

やエビデンスを蓄積して、2017年度から学部教育に展開する予定だ。

ジェネリックスキルの成績評価方法を検討

カリキュラムの体系化と並行して、ジェネリックスキルの評価システムについても、蜂屋氏は他大学とも協働しながら構想を練り始めている。

具体的な評価方法は未定だが、図表3の「行動的知性ルーブリック」を活用した、能力指標ごとの点数評価が検討されている。また、各科目の総合点を知識面とジェネリックスキル面に配分（例えば知識70点、ジェネリックスキル30点）し、シラバスに記すことも検討中だ。実現すれば、ジェネリックスキル修得の達成度の成績への反映を平準化できる。「現状は多くの大学で、ジェネリックスキルの評価が教員の主観によってなされているために、成績や卒業判定にどれだけ反映されているかが不透明。検討が進めば改善に役立つ」と蜂屋氏は言う。

知識面については、学科や課程ごとに定められた目標に対する達成度を、学生ごとにレーダーチャート形式で示すシステムが2010年度に確立。将来的

には、ジェネリックスキルの評価システムも統合し、電子カルテ方式で教員が各学生の状況を閲覧して指導に生かせる環境の構築をめざす。また、学習成果の情報を活用した学生支援について、職員の協力を呼び掛けている。

全学展開の実現には学部の主体性が不可欠

蜂屋氏は、今後の全学的な推進のカギは、「トップの理解」「教員の理解」「学部との連携」にあると考えている。

「2015年度から基盤教育の科目『先輩に学ぶ』に学長自らが登壇し、アクティブラーニングを実践するなど、トップの理解に基づいた推進が実現している。教員に向けては2014年度、基盤教育のAL科目の開発・深化、学内での普及に関する取り組みを公募し、3件の取り組みに経費が支給された。さらに、予算や科目の範囲を拡大する方向で検討が進んでいる」と言う。

2015年度から基盤教育センターに各学部から1人ずつ兼任の教員が配属されることになっているため、学部との信頼関係を構築し、連携強化の起点とする。また、2016年度に新設予定の地域デザイン科学部（仮称）は、全科目でアクティブラーニングを実施する方針という。2017年度から本格化するアクティブラーニングの全学展開に向けて、先導的な役割を果たそうだ。

「基盤教育におけるAL科目だけがアクティブラーニングを実践する科目だという誤解もある。まずはその誤解を解くことが全学展開のスタートかもしれない。教員一人ひとりの理解を得て、学部の主体的な改革への熱意を高めたい」と蜂屋氏は話している。

【図表3】 行動的知性ルーブリック（案）

	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
①自己実現力、計画性		科目A	科目B 科目C	
②創造力、マネジメント力	科目A	科目C		
③論理的思考力、発想力		科目B		
④自己認識、発信力		科目B	科目A	

科目Aの到達目標は、①自己実現力、計画性：レベル3、②創造力、マネジメント力：レベル4、④自己認識、発信力：レベル2であることを表す。